

第 71 回 SGRA フォーラム

20 世紀前半、北東アジアに現れた 『緑のウクライナ』という特別な空間

2023 年 6 月 10 日（土）14：00～17：00

渥美国際交流財団ホール（先着 20 名）およびオンライン（Zoom Webinar による）のハイブリット開催
参加無料

参加には事前登録が必要です。

（最後のページ「参加にあたってのお知らせ」をご参照ください）

【趣 旨】

ロシア帝国は中国とのネルチンスク条約、アイグン条約、北京条約によって極東の大きな領土を手に入れることができた。その極東の国境沿いの領土にはあまりにも人口が少なかったため、定住者を増やすことが政治地理的な大きな課題となった。ほぼ同時期の 1861 年に農奴解放令が發布され、当時ロシア帝国に付属していたウクライナの農奴はやっと農地を手に入れたものの、配給された土地は非常に小さく不満を抱く人が多かった。そこでロシア帝国政府は「帝国の南側から極東に家族ごと移住すれば、かなり大きな農地をもらえる」と宣伝し 1870 年からロシア革命までに大勢のウクライナ人が極東に移り住んだ。1918 年 1 月にキーウで独立共和国の宣言が行われた時、極東のウクライナ人は「緑のウクライナ」という国を作ろうとしていた。1922 年にソ連政権が極東に定着した時、その政権から逃れた 100 万人のウクライナ人がハルビンなどに移り住み 1945 年まで留まっていた。

本フォーラムでは、いろいろな民族が住み、さまざまな文化が存在し、新たなアイデアもたくさん生まれていた、20 世紀前半の極東アジアに存在した特別な空間について話し合いたい。

【プログラム】

講演1 『緑のウクライナ』という特別な空間 30分

オリガ・ホメンコ（オックスフォード大学日産研究所）

1918年1月にキーウで独立共和国の宣言が行われた時、極東のウクライナ人は「グリーンウェッジ」（森が多いので緑、ウェッジは農業ができる場所）と呼ばれていた地域に「緑のウクライナ」という国を作ろうとしていた。

1922年にソ連政権が極東にやっと定着した時、その政権の下に住みたくない100万人のウクライナ人はハルビンなどに移り住み1945年まで留まっていたが、「緑のウクライナ」の夢を捨てられなかった。ロシア帝国でマイノリティーだったウクライナ人は、極東に開拓民として移動し、初めていろいろな民族に対してマジョリティーになり、初めて多くの今まで知らなかった民族や文化に触れ合うことになった。新たなアイデアもたくさん生まれ、ウクライナのアイデンティティーを実感し、自分の国を作ろうとした。極東開発のプロセスで農民以外に、知識人の技師や鉄道関係者もウクライナからやってきた。第一次世界大戦と共に軍人の数も増えた。活発なボランティア活動のおかげで極東満州では20以上のウクライナ語のプリントメディアが出版された。

本フォーラムでは、そのメディアを起こした人達を紹介し、そこで想像されていた「緑のウクライナ」という特別な空間について考えたい。長らく忘れられていた人々多民族国家の夢を見て「極東のウクライナ人」という新聞を自費出版していた技師のドミトロー・ポロウィックや「満州通信」の編集者だったイワン・スウィットの姿を見ながら「緑のウクライナ」について検討する。

講演2 マンチュリア(満洲)における民族の交錯 30分

塚瀬 進（長野大学環境ツーリズム学部）

マンチュリア(満洲)の範囲は時代によって一定ではなく可変的であった。また、そこに住む人々の移動も激しく、日本のように単一的な人々が長く暮らした時期は少なかった。領域の範囲が変動したこと、住民の移動が激しかった地域の歴史は、民族自決による国民国家の形成という過程を主軸に理解することは難しい。

通説的な理解は、マンチュリアはもともと人口稀薄な場所（「無主の地」とも称された）であったが、中国人の移住が20世紀以降増加し、中華人民共和国の東北三省となり現在に至っているというものである。かかる中華人民共和国の一地域へと収斂されていく方向性、言い換えるならば最終的にマンチュリアは中国に統合され、中国人の地になるという理解は、マンチュリアの多様性を取捨している。中国への統合という側面だけではなく、マンチュリアを主体にした歴史理解を本報告は追究している。こうした議論の方向性は、現在世界各国で生じている多くの紛争の基底にある、同質的な国民国家を形成することが難しい地域の歴史的要因の認識につながる。

話題提供1 中国東北地域における近代的な空間の形成：東北蒙旗師範学校を事例に 15分

ナヒヤ（内蒙古大学蒙古歴史学系）

ハルビン、長春、瀋陽を中心都市とした20世紀前半における中国の東北地域でモンゴル族は文化、教育、出版をはじめとする様々な活動を行ってきた。しかし、自力では強力な活動を展開するのが難しく、各地方政権と取引を行わざるを得なかった。張学良を理事長、メルセを校長とする東北蒙旗師範学校はその典型的な例である。

話題提供 2

『マンチュリア』に行こう！

15分

グロリア・ヤンユー（九州大学人文科学研究院）

20世紀前半のマンチュリア(満洲)には、ロシア・「極東」・モンゴリア、中国（特に華北地方）・朝鮮半島・日本から、さまざまな人々が移住してきた。また、鉄道の発展によって国境を越える旅も盛んに行なった。本コメントは、視覚資料、小説、紀行文などを取り上げ、「マンチュリア」の日常生活空間の多様性を描き出す試みである。また、この「越境する現場」の多様な空間の視覚表象は、日本帝国の拡張（のちに満洲国の成立）によって取捨され、そして単一化されつつあったことを明らかにしたい。

自由討論

司会/モデレーター： マグダレナ・コウオジェイ（東洋英和女学院大学）

オリガ・ホメンコ Olga KHOMENKO

オックスフォード大学日産研究所所属英国アカデミー研究員。キウ生まれ。キウ国立大学文学部卒業。東京大学大学院の地域文化研究科で博士号取得。2004年度渥美奨学生。歴史研究者・作家・コーディネーターやコンサルタントとして活動中。藤井悦子と共訳『現代ウクライナ短編集』（2005）、単著『ウクライナから愛をこめて』（2014）、『国境を超えたウクライナ人』（2022）を群像社から刊行。

塚瀬 進 つかせ すすむ TSUKASE Susumu

1962年生まれ。1991年中央大学大学院東洋史学専攻退学。日本学術振興会特別研究員などを経て、1999年長野大学産業社会学部専任講師。2009年長野大学環境ツーリズム学部教授。2023年4月より長野大学環境ツーリズム学部長(博士[史学])。主要著書：『満洲国－民族協和の実像－』吉川弘文館 1989。『満洲の日本人』吉川弘文館 2004。『マンチュリア史研究－「満洲」600年の社会変容』吉川弘文館 2014。『溥儀 変転する政治に翻弄された生涯』山川出版社 2015。

娜荷芽 ナヒヤ Naheya

中国内蒙古大学蒙古学学院歴史系副教授、東京大学大学院地域文化研究科で博士号取得。2011年度渥美奨学生。研究分野は中国近現代史、近現代モンゴル史、日中関係史。単著『二十世紀三四十年代内蒙古東部地区文教発展史』内蒙古人民出版社、2018。訳著『民俗学上所見之蒙古』（鳥居きみこ著）暨南大学出版社、2018など。

グロリア・ヤン ユー楊昱 YANG Yu Gloria

2006年北京大学毕业。2018年コロンビア大学美術史博士号取得。東京大学東洋文化研究所訪問研究員を経て、九州大学人文科学研究院広人文学コース講師。近現代日本建築史・美術史を専門。2015年度渥美奨学生。近著に“圖像與空間：長春近代商埠地的空間形成與發展”藝術理論與藝術史研究 10 (2022.12)。

マグダレナ・コウオジェイ Magdalena KOLODZIEJ

略歴：2018年デューク大学 Art, Art History & Visual Studies 学科で博士号取得。デューク大学でポストドクを経て、2019年から東洋英和女学院大学准教授。研究分野は、東アジアの近代美術史。2017年度渥美奨学生。近著に「Studying Art in Colonial Libraries」など。

参加にあたってのお知らせ

参加には事前登録が必要です。

QRコードまたはURLからお申込みください。

事前登録 URL : <https://onl.bz/9NxZnKe>



お問い合わせ

SGRA 事務局 : sgra@aisf.or.jp

■ 渥美国際交流財団ホール

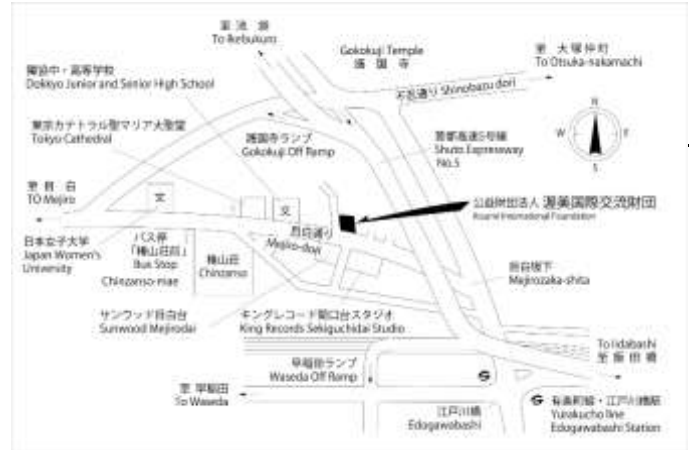
〒112-0014 東京都文京区関口 3-5-8

Tel : 03-3943-761

地図 : <https://www.aisf.or.jp/jp/map.php>

■ 質問とコメントを募集します。

フォーラム当日の自由討論の時間に、会場参加の方もオンライン参加の方もご質問やコメントをご発言いただけます。時間が限られていますので、すべての質問にお答えすることができない場合もございます。あらかじめご承知おきください。詳しくは当日のガイダンスをご覧ください。



■ 技術トラブルが起きた場合には Zoom ウェビナーのチャット機能でご連絡ください。

■ 当日ウェビナー終了後にアンケートが表示されます。今後の運営のため、ご協力をお願い申し上げます。